

総政人の巧

—連載第5回—

大阪府 四條畷市議会議員 渡辺 裕さん

～夢をかなえた大学院生活～

インタビュアー 平松 寿恵 (博士前期課程 2008年度生)



多忙な大学院生活

【平松】 毎回、同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者のお仕事についてレポートする「総政人の巧」。今回からは、博士前期課程2008年度生である私、平松寿恵が担当いたします。そして、第5回目の今回は、大阪府四條畷市で市議会議員として、また税理士としてご活躍されている渡辺裕さんです。渡辺さんは博士前期課程で公共政策コースに在籍され、主に地方財政の問題について研究されてこられました。それではまず、総合政策科学研究科（以下、「総政」

とする）に進学されたきっかけからお話いただけますか。

【渡辺】 僕は同志社大学の商学部を卒業し、商学研究科の修士課程を修了したのちに税理士事務所に勤務しました。学生時代から社会人時代にかけては、税理士試験の勉強を中心に、会計学や地方税をはじめとする税法の勉強を進めてきました。

しかし、地方財政や地方自治といった分野に関する知識は乏しい状態でした。そこで2007年の統一地方選挙に出ると前々から決めていたこともあり、それまでに学術的な面から体系的に

地方財政や地方自治を学ぶことと、これから市議会議員として活動していく際に重要になる問題発見能力や問題解決能力を身につけたいと考え、総政に入学することにしました。総政は働きながら通学することも可能であった点も選択理由のひとつでした。

総政ではさまざまな世代の方との交流を図ることができ、大変充実した2年間でした。多くの知識を身につけられたと実感しておりますし、自分の視野も広がったかなと感じています。

【平松】 渡辺さんは総政時代には税理士試験に合格されたとうかがっています。

【渡辺】 おかげさまで総政を修了するまでに、住民税と消費税に合格することができました。住民税も消費税も地方財政を考えると大変重要な税法であるため、この2つの科目に合格できたことは議員になってからも地方財政を知るうえで有意義でした。受験の時は覚えるのに苦労しましたが、頭の中に条文が入っているのは何かと役立っています。

総政での2年間は本当に多忙でして、①仕事、②税理士試験の勉強、③修士論文執筆、という3つを同時並行させなければなりませんでした。早朝に税理士試験の勉強を3時間程して、日中に仕事をし、平日の夜と土曜日の丸一日は大学院に通い、日曜日に一日中論文を書くという生活でした。そのため、休みはほとんどない生活でした。

ただ、体力的にはきつかったものの、多くの出会いに恵まれてとても充実していましたね。やることが多い時の方が時間を効率的に使うようになるため毎日の密度が高かったと思います。

【平松】 ご多忙な総政での生活において、「故郷、四條畷市の市議会議員になる！」という夢を叶えるために心掛けたことなどはございますか。

【渡辺】 それはやはり、目標を明確にすること、そして時間を大切にすることだと思います。僕には「絶対議員になる！」という明確な目標があったので、その前に税理士の資格をどうしても取得したかったのです。今回はおかげさまで当選させていただくことができましたが、当然ながらこれからも4年に1回落選するリスクがあります。これは公務員とは大きく違う点だと思います。ですから、選挙に落ちたときにでも

生活ができるように手に職をつけておきたかったんです。また、いわゆる職業議員のような立場で保身のための政治活動をしたくなかったというのがあります。それと、税理士の仕事は市の歳入の根幹となる税と深く関わる仕事なので、勉強することが議員になってから必ず役立つとも思いました。

【平松】 そういったことから、市議会議員になってあわただしく活動をはじめる前に税理士の資格を取っておきたかったのですね。

【渡辺】 はい。まず税理士の資格を取得することを議員になるための第一目標としました。僕は目標を実現するために時間を長期的視野で把握するよう心掛けています。たとえば、「10年後こうしたい」という目標があったならば、その目標を達成するために今年やらなければならないことは何か、今年の目標を達成するために今月やらなければならないことは何か、今月の目標を達成するために今日何をするかという感じでした。長期の目標をベースにして短期の課題を見つけ出し、それをひとつずつクリアしていくことが大切だと思います。長期の目標だけではどうしてもイメージが漠然としてしまうからです。そして、毎日寝る前に次の日のスケジュールをできる限り具体的に紙に書き出すようにしています。そうすると、一日のイメージが具体化され時間を効率的に使えるようになります。だから、一日で一番頭を使うのは寝る前です。ちなみに、選挙は2007年4月ということがはじめから分かっていたので、その日から逆算してやるべきことを細分化していきました。

凍りそうだった選挙活動

【平松】 ところで、四條畷市の市議会議員になろうと思われたのはいつ頃ですか。

【渡辺】 議員をめざそうと思ったのは、大学受験で浪人していた18歳の頃です。

【平松】 では、なぜ四條畷市の市議会議員になろうと思われたのですか。

【渡辺】 よく聞かれるのですが、単純に四條畷のことが好きだったからです。浪人時代の1年間、将来どうやって生きていこうかと考え続けました。この1年間はほとんど誰と接することもなかったのですが、考える時間がたっぷりありま

した。そこで考えたのが、四條畷が好きだから四條畷の市議会議員になろうというたってシンプルなことでした。18歳の時に考えて32歳で議員になったので、14年越しの目標を実現できたことになります。

【平松】 ということは、大学に入る前から目標は既に決まっていたわけですね。

【渡辺】 はい。税理士になってから議員になるという目標は大学に入る前に決まっていました。だから、大きな道筋だけははっきりしていました。しかし、そこからの道のりは厳しく、14年かかってしまいました。当初は28歳で実現する計画だったのですが…。ただ、4年間遅くなってしまいましたものの、この4年間は総政の2年間も含めて社会人として多くのことが勉強できたので結果的にはよかったと思います。何事も「人間万事塞翁が馬」です。

【平松】 2007年の四條畷市議会議員選挙で渡辺さんは歴代最多得票でトップ当選しておりますが、強力な組織のバックアップか何かがあったのでしょうか。

【渡辺】 全くありません。いわゆる地盤、看板、カバンは全くありませんでした。事務所開きなんか僕と両親の3人だけでした。僕は誰かの秘書をしたこともないし、他の人の選挙の応援をしたことすらありません。選挙に関しては全くの素人です。だから、9月に「選挙に出る」と言ったときには、いろいろな人から「絶対無理」と言われたし、駅立ちしているときも「そんなやり方で勝てると思っているのか」ってなぜか厳しい口調で言われたこともあります。

けど、僕は自分の気持ちをしっかり伝えれば、人の心を動かすことはできるって信じていました。それと、ここ一番で学生の頃からの友人が

たくさん集まっていろいろ手伝ってくれたのが本当に心強かったです。

【平松】 なるほど。そうだったんですね。選挙戦では駅立ちや自転車に乗って市内を走り回りながら選挙活動を行っていたとおうかがいしたのですが、苦労話なども交えて詳しく聞かせていただけますか。

【渡辺】 駅立ちは、朝の6時から9時までの時間帯と、夜の6時から9時までの時間帯の、1日あたり6時間の駅立ちを7ヶ月間やりとおしました。ただ、2日間だけインフルエンザでできなかったのが今でも残念です。2006年10月から始めた駅立ちですが、10月、11月、12月の間は駅にいてもあまり見向きもしてもらえず、本当に寂しいものでした。

ところが、年が明けて選挙が近づくとつれ、「あいつは今度の選挙に出るんだな」と分かってもらえたようで、それ以降は少しずつ自分のことを見てくれるようになりました。時には声をかけてくれたりして、たくさんの人とお話させて頂きました。ちなみに、興味を持ってかどうか分かりませんが最初に近づいてきてくれたのは学生でした。学生が通るときに一言二言声をかけていたところ、次第に気軽に話せるようになり、すごく応援してくれるようになりました。高校生をはじめとする多くの学生に応援してもらったということは、自分の中で大きなエネルギーでした。

だから、議会で発言する際には若い世代の視点を常に意識しています。学生が将来、四條畷市に安心して住めるようなまちづくりに取り組むようにしないとダメですね。人間関係ができればできるほどいい加減な仕事はやれないと感じます。



渡辺 裕 (わたなべゆたか)

1974年生まれ。大阪府四條畷市出身。大阪府立四條畷高等学校卒業。同志社大学商学部卒業。同大学院商学研究科、総合政策科学研究科博士前期課程修了（2004年度生）。2007年4月の四條畷市議会議員選挙にて歴代最多得票でトップ当選。税理士。

HP <http://watanabe.nanobase.co.jp>

このように、駅立ちをして学生に対するイメージはかなり変わりました。最近の学生に対しては、何となく昔と比べてどこかマイナスのイメージを持っていましたが、実際に会って話してみると、すごく礼儀正しかったり、純粹だったり、すごくいい学生が多かったです。だから、駅立ちを通じて「日本の未来は明るい」と思いました。こういうことも実際に接してみないと分からないことでした。

自転車に関しては、主に土日に一日7時間くらい市内を走り回りました。「32歳 本人」というノボリを自転車につけて市内を走り回ったんです（写真参照）。最初は、「あいつ何やってんねん」、「変な人がおるわ」という視線を感じました。しかし、選挙戦の終盤には小学生が「おっ、本人だ。がんばれ!」と喜んで追っかけてくれたりしました。当選した翌日にも自転車で走っていたところ、子供たちから「ほ〜ん〜にん、ほ〜ん〜にん」と本人コールをしてもらったときは心から嬉しかったです。

ただ、自転車もそうなのですが、人生で一番恥ずかしかったのは、やはり最初の駅立ちでした。どうしても勇気がいりました。それと、恥ずかしさから声が小さかったようで、いろいろな人から「声が小さい」と指摘されました。ただ、もともとあまり声は大きい方ではないし、押しが強い方でもありません。けど、そう言うてはいられないので、声は無理して大きくしたつもりです。

駅に立つのにも意外と体力が必要で、はじめの1ヶ月くらい全身筋肉痛でした。ストレスでヘルペスを2回発症しました。現在でも初心を忘れないために朝の駅立ちは欠かさないように



しています。議員の仕事は街頭演説で自分の意見を伝えるのも大切だとは思いますが、それ以上にたくさん人の話を聞いて、たくさん人の意見を市政に反映することのほうが大事だと僕は思います。だから、駅立ちでは演説というスタイルではなく、一人一人に挨拶をしてお話をするようにしています。

駅立ちも議員活動もこれが正解という答えはないような気がします。そういう意味では、結構自由が認められた世界だとは思いますが。だから、自分なりのスタイルで今後もやっていこうと思っています。

ちなみに、選挙のときの駅立ち、特に1月から3月にかけての駅立ちは凍死しそうなくらい寒かったです。足元からカラダが徐々に凍っていくのがリアルに感じとれます。とりわけ、夜の駅立ちは遅い時間になると次の電車が来るまでほとんど誰も通らないものだから、一人でぴよぴよ跳ねながら凍らないようにしていました。

公示されてからの純粋な選挙期間は一週間ですが、平日最後の金曜の夜は5時から終電の12時26分までずっと駅に立ち続けました。この日は今までの7ヶ月間活動をしてきたことや目標を決めてから14年間自分なりに全力を尽くしてきたことなどを思い出すと涙が止まりませんでした。結果がどうこうというより、完全にやりきったという達成感みたいなものがありました。通りかかる人があちらから握手してくれたり、拍手してくれたりしました。そのときが間違いなく人生で一番嬉しかったです。感動しました。

議員活動の難しさ

【平松】 いろいろと工夫されて、実際に当選されて市議会議員となった今、お仕事の方はいかがですか。

【渡辺】 やはり、まず長年目標としていた仕事ができていることがすごく幸せです。だから、選挙で僕を選んでくれたり、手伝ってくれたり、応援してくれた人に感謝の気持ちを忘れないようにしています。

議員の世界に関しては、いろいろな人がいます。考え方ひとつにしても、保守系の考え方の

人やいわゆる共産党的な考え方の人もいたりして、主義主張がぶつかり合っています。ただ、どの考え方が正しいというのではなく、社会には様々な考え方があってこそ新しい力を生み出すし、いろいろと意見を出し合って議論することが社会をよくするための原動力になるんだと思います。

組織にしても、同じ考えの人だけでは本当の意味で強い組織にはならないのではないのでしょうか。僕は、いろいろな考えの人がいるからこそ議論をし、そこから組織を改善したり、新しいアイデアが生まれてくるんだと思っています。おそらく、みんなが同じことを考えていたら改善策もみつからないし、新しい発見やアイデアも出てこないでしょう。

公務員という世界に関しては、マスコミ等の情報からのイメージでひどい集まりみたいなもののように感じていましたが、ほとんどの人が真面目ですし、信頼できる人も多いと思います。ただ、コスト感覚とスピード感が少し欠けていることと、情報の新陳代謝ができていないことは、若干気になっています。コスト感覚が乏しいと感じる大きな原因として、公会計の世界には減価償却の概念と、借入の返済について元本と利息を分けるという概念がないことが大きく影響していると思います。減価償却の概念と借入の関係はワンセットです。減価償却というのは、建物などを建てたときにその使用期間に応じて費用に計上していくことです。借入は元本の返済はただ借りたお金を返すだけであり、損益には関係しませんが、利息は費用です。だから、借入をして建物を建てるということは、減価償却費という費用に、利息という費用が追加してかかっているということです。当たり前のことではあるのですが、意外とこういう認識ができていないのが現状だと思います。実際、市債を発行したら利息分だけは間違いなく追加で費用が発生しているのにも関わらず、「市債は期間に従って償還してます」という感じで何の問題もないみたいに捉えてしまっていることは、大きな問題ではないでしょうか。そのため、もっと複式簿記の考えを共有できるようになるだけでも、コストに対する感覚のようなものはかなり改善できると思います。

それと、四條畷市役所は駅と駅のちょうど間にあるのですが、そうすると他に周りに企業も

ないため、市役所だけで世界が完結しているんですね。市役所の中の居心地がよければ、その中で変わろうという意識が働きません。民間だと常に企業同士の関わりがあったり、お金に関して何かと注文をつけられたり、ときには言いにくいことも言って商売していかなくてはいけないことも多いと思います。このように考えると、公の世界のコスト感覚とスピード感が不足している最大の原因は、基本的には外とのお金のやりとりが少ないことに起因するんだと思います。

それに加え、市役所では、窓口業務でなければ基本的に毎日がデスクワークなんです。外部との関わりが無いということは、自分を変えていこうという動機が働かない気がします。また、ひとつの組織の中にだけいるから、新しい情報が入ってこない。この体質だけは何とかして変えなければなりません。こういった環境の中でどうやって他との交わりを作るのかというのは大事です。外との接点を作って新たな情報が入るように取り組み、そうすることで意識改革をするべきではないかと主張しています。

ただ、これらは自分に対しても言えることです。そのため、僕自身、市役所の中にどっぷり浸かってしまい、こういう環境に慣れてしまった、ということがないように常に市役所だけでなく広く社会と接するように心掛けたいです。

【平松】 そうですか。市議会議員になってから、他に何か感じたり、思ったりすることはありますか。

【渡辺】 議会はとにかくいろいろな人に対して気を使います。最年少ということもありますし、1期目ということもありますので。今までに経



験したことの無い世界であることは間違いないですね。「ややこしやー、ややこしや」です。空気を読むことがかなり重視される世界だと感じます。しかし、言うべきことは言わないとそれこそ存在意義がなくなります。そのあたりのバランスが難しいですね。

それと、普段接する職員の人は部長級や課長級の人を中心ですが、20年後、30年後のことを考えるとやはり若い職員との意見交換できるようにすることが大事だと思っています。立場は違うけれども、違う立場だからこそ意見を出し合って、市政の改善策を見つけ出し、また、考えを共有することが将来きっと役立つと思っています。といっても、まだまだ接する機会が少ないですが。

四條畷市の今後と自分

【平松】 なかなか苦労が多そうですね。では、渡辺さんの考える四條畷市の今後の展望について聞かせて下さい。

【渡辺】 やはり財政再建が主要課題であることは間違いありません。財政というのはちょっとずつの積み重ねです。突発的によくなるものではない。企業会計では、貸借対照表と損益計算書というものがありますよね。損益計算書は一期間の損益を表すもので、貸借対照表というのは一時点での資産と負債の状態を表すものです。それは、一時点といっても過去の積み重ねによってできあがるものなんです。ということは、貸借対照表を見たときにすごく悪い企業というのは、長い期間をかけて少しずつ悪くなっている可能性が高いのです。四條畷の財政も長い期間をかけて徐々に悪くなったというのが実態だと思います。

この財政状況をどうやって改善させるかという、いわゆる劇薬みたいなものを使って一発で改善するというのではないと思います。そういうことはありえないので、20年、30年かけて悪くなった財政を立て直すには1年や2年という短期間ではなくて、やはり20年から30年の歳月をかけて少しずつ改善させるしかありません。それはどこの自治体も一緒ではないでしょうか。そう考えると、財政も人もすごく似ていて日々の積み重ねが最も重要なんだと思いま

す。

それと、もう1点は、最初の頃、四條畷市の財政をみたときに「なんて悪いのだろう」と絶望していたのですが、1年間勉強して思ったのは、悪いことは間違いなく悪いけれども、相対的に悪いかということでもないのではないかと、ということです。というのも、一般会計が悪い自治体というのは財政状況が悪いと思うかも知れませんが、財政というのは一般会計だけではなくて特別会計もあるわけですし、そのトータルで良し悪しをはかるべきなんです。実際には一般会計で比較しているところが多いんです。一般会計の黒字か赤字かというのは、いくらでも特別会計との繰入金と繰出金との調整で黒字にもできるし赤字にもできるんです。そう考えると、財政の全体像を把握するときに、一般会計だけしかみないのは木を見て森を見ない状態だと言えます。一般会計はすごく悪いのだけれども、特別会計はそこまで悪くないので、全体でみると四條畷の財政は確かに悪いけれども近隣の市町村と比べると、そこまで悪くないかなと思うんです。つまり絶対的には悪いが、相対的にはそこまで悪くないので絶望する必要はないというのが僕の考えです。

しかし、財政構造は歳入の大部分を地方交付税に依存しているので今後のことを考えると自主財源を確保することが絶対に必要だと思います。国の政策に左右されないようにするためにはそれが間違いなく重要になってくると思います。だから、この状況をまずみんなが把握したうえで、どうやったらよくなるのか意見をぶつけあうことが四條畷再生の第一歩かだと思います。状況は確かによくなるけれど、よくないからこそ改善点も見えてくるし、組織としても個人としても進歩できるチャンスだとも思います。

【平松】 なるほど。それでは、渡辺さんの個人としての今後の展望を聞かせてください。

【渡辺】 今はまず与えられた仕事を着実にこなすこととしっかり勉強することだと思います。常に意識しておかなければならないことは、一部の人のためでなく、市民全体のため、また、短期的でなく長期的に見ても市民のためにはどうすべきかと判断することが大事だと思います。先程も財政再建が最大の課題だと言いましたが、財政再建ってのもすごく抽象的な言い方

で「財政再建ってなんやねん」と思う人も多いでしょう。特に若い世代の人なんかは、財政は再建しても再建しなくても一緒じゃないか考える人も多いかもしれません。しかし、抽象的な言葉ではあるが、よくよく考えると本当に重要な課題だと僕は思います。では、財政再建とは何かと考えると、将来の世代に負担を押し付けられないことだと僕は考えています。つまり、今の赤字は誰が負担するのかといたら、僕らの世代であったり、学生であったり、若い世代だと思うのです。

今のところは、赤字だと言っても表面上の負担が低くて楽かもしれないけれども、その赤字分は借金に回しているということになります。このことはすなわち、負担をドンドン先送りして何となくお茶を濁しているような状況です。だから、今まで、税金、年金、健康保険の負担率が3割くらいで推移していたのが、20年から30年後になって気がついたらそれらの負担が4割から5割になることもあり得ます。給料が20万円だったとすると半分の10万円は税金等で天引きされ、手取りは10万円になる可能性も十分あります。なぜそうなるかという、今の先延ばしに、先延ばしにというツケがやっぱり後になってポディーブローのように効いてくるということなんです。だから、財政を再建するということは、現状の借金体質を少しでも改善させて、次世代への負担を少しでも減らすということだと思います。それが僕の使命かと思っています。



渡辺さんの活動風景

みなさんへ

【平松】 では、最後に本研究科で勉強している皆さんに何かメッセージをお願いします。

【渡辺】僕は、学生のうちはやはりたくさんの人と交流するべきだと思います。価値観は人それぞれなので、いろいろな人の価値観を知ったうえで自分の価値観を育てていくことが大事だと思います。人の考えや世の中の情報というのは本やテレビからでも得られます。しかし、それももちろん重要なだけけれども、本当に大切なことは人と人が向かい合った時にしか伝わりません。だから、僕が常々思っているのは、駅立ちにしても同じなのですが、顔を向き合った「face to face」の関係が一番大事だということです。その大事さを学生にも意識して欲しいと思います。

たとえば今、パソコンや携帯電話が普及してメールでのやり取りが増えていますが、文字だけではやはり誤解が生じますよね。電話でのやり取りも、顔がみえていない状況では本当の意見や気持ちが伝えられないと僕は考えます。だから、いろんな人と常に顔が見える関係を大事にしていますし、これからもそう続けたいと思います。総政で研究する方には社会人などせっかく色々な方がいるのだから、キャンパス内で多くの人と実際に接することによって研究論文だけでなく広い知識を身に付けていくべきじゃないかなって思います。

【平松】 本日は、貴重なお話ありがとうございました。私自身、渡辺さんのお話を聞いて大変勉強になりました。今後のご活躍も応援しています。

募集しています

「総政人の巧」では、読者のみなさまからのご意見、ご要望、ご感想をお待ちしております。どんなことでも結構ですので下記の連絡先までお寄せください。この企画は読者のみなさまとともに作り上げていくことをめざしています。

「総政人の巧」企画部会 平松寿恵
syoshinnsya@y6.dion.ne.jp